

この月刊サワネを、お知り合いの方に見せてあげてください、きっと喜んでいただけます。

『君はなぜ学ばないのか』 田村耕

太郎著 ダイヤモンド社 399 頁 1800 円(税別)

著者はシンガポール国立大学の教授。冒頭に著者が「学ぶ」ことを勧める理由が書かれています。それは、「長続きする幸福感を味わってほしいから」です。「知らなかったこと」や「新しいものの見方に出会うこと」は、とても人を幸せにするからです。著者は「学生時代に勉強が嫌いだったが、社会人になって、好奇心を発動していろいろなことを自発的に学んでいくとすさまじい幸福感を感じた」のです。好奇心の発動で、幸せホルモン(ドーパミン、オキシトシン、セロトニン)が分泌されるのです。

★世界の大転換点:「世界のアメリカ頼みからの自立」「アメリカの凋落」「アメリカの自滅」、これらはすでに起こっているが、これが加速する

★死ぬまで学び続けることが必要なワケ

- ・世界は変化し続けるので、自分も変化しなければならない
- ・その変化の方法を自分で決めるために学ばなければならない
- ・人生は長くなり、引退して年金だけで暮らしていくのは難しくなる
- ・いやでもギリギリまで働き、稼ぎ続けるしかない
- ・学ばないと経済的な損失を被る

★歴史を学ぶメリット

- ・勇気が出る
- ・現代のトレンドを読める
- ・歴史は知恵とアイデアの宝庫

★中国は台湾を攻めない

- ・侵攻のリスクとコストが高い
- ・失敗したら習近平失脚
- ・攻め落とすよりも、占領し続けることがさらに難しい

・中国の本質は、拡張主義ではなく、間接的支配

・侵攻ではなく、人を送り、民主主義に介入、SNS でかく乱してくる

★大災害と地政学リスクは同時に来る

・南海トラフ、首都直下地震、富士山噴火が同時に起こりうるサイクルに入った

・これらは、ほぼ必ず数十年以内に来る可能性がある

・大災害は、大きな政治的变化につながる

★好奇心で仕事を道楽に: AI はすでに生活に入り込んでいて、さらに入り込む。こういう時代にどう生きるのが世界中で議論されているが、答えは「仕事の道楽化」である。これを説いていたのは、江戸時代に生まれ戦後まで生き抜いた明治神宮の森の生みの親、官僚・投資家・教育者だった本多静六氏だ。「仕事の道楽化」とは、仕事を楽しみや趣味のように感じることだ。本多氏は、富や名誉、贅沢な生活よりも、職業を道楽として楽しむ方が幸福であると主張した。AI が最後までできないのは、好奇心に基づく探求である。仕事の道楽化とは、働けば働くほど、脳内で幸せホルモンが湧いてきて、嬉々としてさらにゾーンに入って働くという状態だ。

★SF 小説を読みまくれ: 簡単に50年先、100年先を見通すやり方。SF 小説は、科学や技術が進化した世界を描いている。SF 小説は未来を見る力を養い、技術革新や社会変革に対する切り口や洞察を深める重要な入口だ。著者が現在アメリカで中心にかかわり、投資している案件の多くは、SF 的だ。

・天気を自在に変える

・地震の 8 時間前に、発生源とマグニチュードまで完璧に予測する

・植物の気持ちを言葉に変えて、コミュニケーションを取り、食糧生産や二酸化炭素吸収の効率を上げる

この月刊サワネを、お知り合いの方に見せてあげてください、きっと喜んでいただけます。

SF

前項の『君はなぜ学ばないのか』で紹介されている SF 小説をあげました。『銀河ヒッチハイクガイド』は 300 頁ほどですが、他の二つは長いです。

★『銀河帝国の興亡』アイザック・アシモフ

人類が銀河系全体を支配する遠い未来、しかし銀河帝国は衰退し崩壊に向かっている。数万年に及ぶ混乱(暗黒時代)が迫っている。

主人公は数学者 ハリ・セルダン。彼は人類社会の大規模な行動を統計的に予測する学問「心理歴史学」を創始し、帝国崩壊後の混乱を最小限に抑えるための計画を立てる。その計画に基づきセルダンは、帝国崩壊後に訪れる 3 万年の暗黒時代を、わずか千年に短縮することを目的に、「ファウンデーション」という組織を銀河の端に設立する。

★『銀河ヒッチハイク・ガイド』ダグラス・アダムス
平凡なイギリス人 アーサー・デント は、ある日、自宅がバイパス建設のため取り壊されることを知らされる。その直後、なんと地球自体も「銀河ハイパースペースバイパス」の建設計画により破壊されることが判明。彼を救ったのは、友人の フォード・プリーフェクト。実は彼は地球に調査に来ていた異星人で、『銀河ヒッチハイク・ガイド』という電子書籍(銀河旅行者向けガイドブック)の記者だった。二人は宇宙船に便乗して脱出し、さまざまな奇妙な存在と遭遇する。

★『三体』劉慈欣

中国の文化大革命期(1960~70 年代)、女性物理学者 葉文潔(イエ・ウェンジェ)は人間社会に絶望し、秘密裏に行われていた宇宙電波通信基地「紅岸基地」のプロジェクトに関わる。彼女は地球外文明に信号を送信し、偶然にも地球から 4 光年離れた惑星「三体星」の文明と接触する。

米国に「暴力的衰退」の恐れ

11 月 2 日の日経新聞に著名な歴史人口学者エマニュエル・トッド氏へのインタビューが掲載されていました。『米国に「暴力的衰退」の恐れ』がそれです。ネットにも掲載されています。氏の考えが簡潔に述べられています。簡単にご紹介します。

★米製造業の復活: 米国が輩出する技術者は人口が半分以下のロシアより少ない。原因のひとつは、ドルの覇権だ。成功を目指す優秀な若者は自動車や航空産業ではなく、ドルが湧き出す魔法の泉、金融や法律分野で働く。

★ソ連の崩壊: 西側の勝利というのは誤解だ。崩壊に向かう米ソ両体制のうちソ連が先に崩壊したただけだ。

★乱暴な崩壊: 米国の衰退は長期の傾向で、私の関心事はむしろ衰退が平和裏に起きるか暴力的になるかだ。現時点では、乱暴な崩壊しか予想しにくい。

★プロテスタント: プロテスタント主義には誰が救われるかは神が事前に定めているとする『予定説』がある。英国やその影響を受けた米国で経済格差が容認されやすい一因だ。貧困は神に救われない人の定めとの考えにもつながり、その意識が残る米社会の不幸に拍車をかけている。内戦の可能性が指摘され、大統領は国内の民主党系の都市に部隊を派遣している。政権が国内外を区別できなくなるのは帝国崩壊時の典型的な現象だ。米国が同盟国への支配と搾取を強める可能性があり、日本も注意が必要だ。
★中国: 人口が急減する中国への過度な心配は不要だ。ともに人口が減る日中が通常戦争に備えるのは愚かだ。紛争に巻き込まれるのを避けるなら核の保有が有効だ。平和への唯一の賢い投資だ。米軍沖縄撤退の可能性、それを中国が歓迎する可能性がある。

この月刊サワネを、お知り合いの方に見せてあげてください、きっと喜んでいただけます。